色彩教材研究会通信　No.410　2024.10.3

発行人：永田泰弘
nagataya@jcom.zaq.ne.jp

●高専の後期の始まり

マイペースで３日坊主気味の主査ですが、これで研究会通信が 11 回目となりました。これだけ続くのはある意味では奇跡です。これが習慣となればと願う今日この頃です。

10 月１日より，木更津高専の後期が始まりました。学生も元気に登校しています。2024 年度後期の授業は「コンピュータ入門（ネットワーク関連）：１年」「実験実習（デジタル電子回路）：２年」「プレゼンテーション技法：４年」「メディアデザイン：５年」「ヒューマンターフェース：専攻科１年」「特別実験（デザイン制作・評価）：専攻科１年」，更に研究（４年～専攻科１年）が加わります。

主宰しているメディアデザイン研究室は、専攻科１年生が１名、５年生が３名、４年生が５名、そしてシンガポールからの短期留学生が１名で構成されています。研究テーマは，教員からは一切与えることはせず、全て学生に決めさせています。よって私自身が思いつかない斬新・ニッチ・マニアックなテーマで溢れており、研究室のみんなは楽しく研究に取り組んでいます。いくつかの成果が、来年３月に開催を計画している「色彩教材ギャラリートーク」で発表できたらと考えています。

（吉澤陽介　主査より：011）

●漢字の「色」と「彩」の使い方

「色」という文字は、漢音で「ショク」、呉音で「シキ」、訓音で「イロ」と読む。

「ショク」は、色として、寒色、原色、染色、着色、配色、白色、発色、変色などの表現がある。顔の感情表現に、顔色、気色、喜色、愁色、生色、難色、憂色、令色など。女性の美しい顔かたちに、国色、才色、容色。

男女間の情欲やセックスに、漁色、好色、酒色、男色、売色など。ものの様子や趣きを、異色、古色、秋色、出色、潤色、遜色、特色、敗色、暮色、国際色などと表現する。

「シキ」は、色感、色彩、色紙、色素、色調、禁色、金色、彩色、気色。色情、色魔、色欲、景色、色界、色心、色即是空など。

「イロ」は、色糸、色気、毛色、茶色、音色、旗色などと使われている。

一方、「彩」は、漢音と呉音で「サイ」、訓音で「イロドル」と読む。美しい色をつけるイロドリとして、彩色、光彩、色彩、水彩、精彩、多彩、淡彩などと使い、姿や様子の表現に、神彩という言葉がある。

「色」と「彩」を組み合わせた「色彩学会」の研究範囲の広さを想像して、研究分野の拡大を考えるのも一興であろう。

（永田泰弘）

● 万葉集のなかの色名 -18

い行会いの　坂の麓に　咲きををる
　桜の花を 見せむ児もがも
（巻 9-1752）

鶯の　木伝う梅の　うつろえば
　桜の花の　時片設けぬ
（巻 10-1854）

花咲きて　実は成らずとも　長き日に
　思ほゆるかも　山吹の花
（巻 10-1860）

河蝦鳴く　吉野の川の　滝の上の
　馬酔木の花そ　末に置くなゆめ
（巻 10-1868）

藤波の　咲く春の野に　延ふ葛の
　下よし恋ひば　久しくもあらむ
（巻 10-1901）

女郎花　咲く野に生ふる　白つつじ
　知らぬこともて　言はれしわが背
（巻 10-1905）

万葉集では、梅と桜では、梅を詠んだ歌の方が多いと言われている。馬酔木はツツジ科の常緑低木で白いつぼ形の花をつける。藤波は風で揺れる藤の花房。白つつじと使っているので、赤系のつつじも知られていたと推測される。女郎花は黄色い花をつける。

＊講談社文庫・中西進・万葉集から（永田泰弘）